伊勢物語芥川図　伝宗達筆　紙本著色
日本・江戸時代初期　24.6×20.8cm

大和文華館蒐集ものがたり6

宗達の伊勢物語芥川図

大和文華館々長　矢代幸雄

伊勢物語は、徒然草と共に、私の愛読の書である。

「昔、男ありけり。女のえ逢ふまじかりけるを、年を経てよばひ渡りけるを、辛うじて、女の心を合せて盗み出でて、いと暗きに、率てゆきけり。芥川といふ川をいきければ、草の上におきたりける露を、かれは何ぞ、となむ、男に問ひけるを云々……。」

伊勢物語のこの美しき文章は、詩化と抒情の絶響である。折角惨憺たる苦辛を以って盗み出した女を、その兄が追いかけて来て、忽ち取り返されてしまった馬鹿らしさ一否、当人にとっては馬鹿らしさどころではあるまい。若気のいたりの業平にしてみれば、死ぬほどの悲しみと、口惜しさと、絶望とであったであろう。それだから、乱暴に女を取り返し去った兄を、鬼にしてしまって、「はや女をば、ひと口にくひてけり」と、有無を言わせぬ鬼の非情に帰してでも観念するほかはなかったようである。やる瀬なき業平の憤怨である。人間業平の弱さは、人間の恋情によせる大方の人々の同情によって頗る美化され、その芸術的美化は万人の胸に泌み透り易く、斯くして出来た人間心理の微妙さを捉えた傑作伊勢物語が、世に広く愛読された所以であったろう。

この遠い昔の平安朝の夢を、まるであざやかに眼にみるように、宗達の筆が描き出して居る。この「芥川」の物語は、伊勢物語のうちでも最も宗達に気に入った画題であろう。宗達はこの図ばかりは3図1組の続き絵としてまで描いている。そしてこの3図の対照はいかにも面白く出来て居て、宗達はこの図様の劇的構成には、余程の熱を入れて構図したものと思われ、この構図はまことにすばらしい。芥川のほとりの露深き草原をさ迷う男女の遅々たる足並み、その若い人々の色合の多い情緒纏綿たる美しさ。然しながら、あたりを罩むる燻し金の明暗と凄艶なる紺青色の流水の屈曲、即ちそのあたりには、既におどろおどろしく不穏な気配が含まれて居て、次の場面の暴風雨と雷神出現のすさまじい光景を予想させている(第1図)。雷神は黒雲に乗り、物凄く乱れた怒髪と長い纏衣とを強風に靡かせて、天上に躍り出て、爛々たる大眼を輝かし、口を耳まで裂いて、筋肉隆々たる手足を振り廻して、あばれ廻っている。その強暴さを現わすがために、前図の可憐なる男女のからみ合いを現わす細線のおとなしい筆致とは、すっかり変って、今度は活躍的なる荒々しい筆力を用いて、雷神の怒りを縦横に描きなぐっている(第2図)。男は外部で気を張って弓を持って天を睨んでいるけれども、室内に隠れた女は、もはや鬼に1口に喰われてしまったか、頭は見えず、唯、倒れ伏した後姿が見えるだけである。長い黒髪のみがやるせなく流れている（第3図）。

私は昔、宗達の色紙36枚からなる伊勢物語の1帖を益田家で、ただ1度見せてもらった時から、或いはまたその後、この帖の複製が出来た時、それを喜んで眺めていた間にも、私は常に私の特に愛する「芥川図」の図様を忘れかねていたところ、戦後この帖が1枚1枚分割されて売りに出たので、私は早速、「芥川」はどうなったかと捜した。雷神の図は、宗達の有名な建仁寺屏風の雷神とよく似ているので、特に高価を呼び、豪華好みの梅原画伯が殊にこの図が気に入ったという話も伝わって、大評判になった。私は大和文華館のために、それも欲しいが、それを買うくらいならば、哀艶なる川のほとりの駈落の図も一緒に欲しい、などと勝手な考えをしているうちに、雷神の図は何処へ行ったか、わからなくなった。それで失望していると、或日、突然、芥川のほとりの図に出逢ったので、今度こそこれは逃せない、と思って、これを大和文華館のために購入したのであった。壮観なる雷神の図が私の視界から失われたことはいかにも残念であるけれども、結局地上の人間である私にとっては、怪神が空中に消えた残念さよりも、あざやかな男女2人が駈落する、可愛らしい嵯峨人形の芝居の如き光景を、この露けき金色の河原の描写の中に見る方が、よほど嬉しい。

季刊 美のたより No.10
昭和44年6月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.